

# 江戸時代の怪談研究

## - 百物語怪談集を中心に -

きむ よんほ  
金 永昊

### ・ 序論

#### 1. 研究動機

川端康成<sup>1</sup>と大江健三郎<sup>2</sup>の二人のノベル文学賞受賞によって、日本文学に対する世界の関心はだんだん高まっている。そして日本文学の翻訳作品も海外で好評を受けている。韓国の場合は、村上春樹の作品は毎年ベスト・セラになるほど、とても人気がある。そして、大学でも日本の文学を勉強しようとする学生が増えている。このように日本文学は韓国だけでなく、世界でも高く認められているが、それが近・現代に偏っているような気がする。古典は『源氏物語』<sup>4</sup>『枕草子』<sup>5</sup>ぐらいを除けば、ほとんど外国人には読まれていない。古文はどうして外国人に読まれないのだろうか。その理由を考えてみた。第一に、漢字が難しい。つまり常用漢字に載っていない漢字でできている官職名、固有名詞、地名などは漢字文化圏の中国・韓国人にも難しいのである。第二には、古典文法が難しいので古文には親しみが持てない。第三には、現代語訳されている文は敬語がやたらに多くて、わずらわしくなってしまう。そして第四には、その表現が現代人の感性や感心からあまりにかけ離れていて、現代語訳すると意味やその感動が半分に減ってしまうからである。

ここで私は三つのことに主眼点を置いて作品を選んだ。つまり面白くて、短くて、理解しやすい作品である。ここで取り上げようとする百物語怪談集は室町時代(1336 - 1573)末期から江戸時代(1603 - 1867)にかけて出版された本である。特に江戸時代には印刷技術の発達などの要因によって、町人<sup>6</sup>・庶民層を対象とする大衆文学が盛んであり、百物語はそのような大衆文学の一つである。この百物語を通して、江戸時代を生きた町人・庶民が

<sup>1</sup> 1899 - 1972。小説家・批評家。1968年ノベル文学賞受賞。『雪国』(1935 - 1947)『伊豆の踊り子』(1926)

<sup>2</sup> 1935年生まれ。文学者。『飼育』(1958)で芥川賞受賞。1994年にノベル文学賞受賞。『個人的な体験』(1981)

<sup>3</sup> 1949年生まれ。早稲田大学文学部卒業。『風の歌を聴け』(1979)で新人賞受賞。『羊をめぐる冒険』(1982)『ダンス・ダンス・ダンス』(1988)

<sup>4</sup> 作者は紫式部。主人公光源氏の一生とその一族たちの様々の人生を70年にわたって構成した。王朝文学の最高峰を成している。

<sup>5</sup> 作者は清少納言。平安(794 - 1192)初期の随筆。『源氏物語』とともに王朝女流文学を代表する傑作。

ら武者・学者ら知識人に至るまでの生活や、彼らの関心が何だったのか、そして百物語が占める意義について考えてみよう。

## 2．怪談

妖怪や怪異を内容とした話しの総称で、具体的には民間伝承の説話に出てくる怪談、演劇での怨霊劇、文学での怪異小説などをいう。古代人の自然崇拝や畏恐心、または宗教的な神秘感が超越的存在を信じさせ、怪異な雰囲気を生み出したことからその起源を探ることができる。そして超現実的な存在に対しての興味や感心は誰にも共通するものであって、古今東西を問わず全ての人間の興味を引きながら発展してきた。このような超現実的な存在を一般には「化物」とか「お化け」とかで呼ばれるが、その言葉は幽霊を含めて曖昧に用いられている。しかし、民俗学の立場からは妖怪と幽霊とは明らかに区別されている。妖怪というのは、特定の場面に限るけれども、特定の相手を選ぶものではない。しかし、幽霊の方は特定の相手を選ぶけれども、特定の場面に限るものではない。また、妖怪というのは様々な姿に化けるだけでなく、物音や火や風としても現れるが、幽霊の方はありのままの人間の姿で現れるのである。

怪異の出現や活動を人間性に基づいた必然性として把握し、描写したのが怪異小説や怪談集などの文芸、怪談狂言や怪談落語の芸術としてもはやされた。このように人間の素朴な恐怖心や超越的な存在に対しての関心はそれだけで終ることなく、神秘的な幻想美や妖艶美にまで高められ、芸術的に昇華されていったのである。

## 3．日本の怪談

『日本霊異記』<sup>7</sup>や『今昔物語集』<sup>8</sup>などいくつかの先行の説話集は怪異に関することを扱っているが、怪異集としてまとめたものとはいえない。近世に入ると民間の怪談を互いに語り合う流行が生じ、＜百物語＞＜お伽はなし＞＜諸国はなし＞が武家層から庶民層まで大に行われた。近世初期の怪談集として『御伽物語』(1660)は民間説話の集録を企て、鈴木正三<sup>9</sup>の『因果物語』(1661)<sup>10</sup>は仏教思想の宣伝を図り、浅井了意<sup>11</sup>の『御伽婢子』(1666)<sup>12</sup> 巻は中国文学の翻案を試みたもので、怪奇物の祖として後世に影響を与えた。その系統から上田秋成などの知識人作者による現実批判としての幻想怪異小説が生まれた。上田秋成<sup>12</sup>の『雨月物語』(1776)は中国・日本の古典に多く素材を得た短編怪異小

---

<sup>6</sup> 江戸時代に都市に住んだ商・工業者の総称。

<sup>7</sup> 823 頃成立。異聞・因果談・発心談など116の説話を日本風の漢詩で記した日本最古の仏教説話集。

<sup>8</sup> 31 巻であるが、現存は28 巻。12 世紀初め成立。天竺(インド)・震旦(中国)・本朝(日本)の3 部に分かれ、1000 余の説話を収める日本最大の古説話集

<sup>9</sup> 1579 - 1655。仮名草子作者。仏教的思想が強い作品を多く書いた。

<sup>10</sup> 江戸前期の仮名草子。仏教の因果話を中心に、諸国の怪異、奇談を収録。

<sup>11</sup> 1612 頃 - 1691。仏書・和歌・軍書・古典注釈などの著作がある。仮名草子は『御伽婢子』『狗張子』など。

<sup>12</sup> 1734 - 1809。国学・漢学を学び、浮世草子・俳諧などの作品もあるが、読本に自分の能力を発揮した。『雨月物語』のほかに『春雨物語』がある。

説9編から成った作品で、怪異小説の伝統を受けながら高度の洗練を加えたものとみられる。一方、百物語怪談集を中心とした民間怪談はしだいに異様で気味の悪い性格や教訓、あるいは好色的な性格になって行く。そして因縁話的な色彩を求める。その結果、江戸時代後期になると芸能・文芸を問わず、職業化した作者や役者が現れる。彼らは合巻・読本・歌舞伎などで争って人間世界の邪悪な葛藤、それを原因とする殺人・加虐そして血まみれな亡霊や、目も当てられないほとむごたらしい復讐を題材とした。あるいは「化猫」「蛇の執着」といったテーマに走るとともに独自の妖美・淫虐な世界を作った。

#### 4．百物語怪談集

##### 4-1 百物語怪談会とは？

夜、人が集まり、周囲を青い紙で張った行灯に百本のろうそくを入れ、恐ろしい話を交代で語りながら一話終わるごとにろうそくを一つずつ消してゆく。怪談が百話に満ちた時に妖怪が出現すると言い伝えられて、主として江戸時代に行われた。このような百物語は当初、武士の肝試しの会であったが、江戸時代に入ると怪談話を楽しむ会になっていったという。しかし、百物語は盲目的に信じられていたわけではない。更に、『百物語』という作品自体が笑話集であり、例えば、『さとすすめ』(1777)では余りに話が長いので外で化け物が大あくびをしていたなどと、時間が経つにつれて恐ろしいはずのものが徹底的にひやかされていたり、教訓的性格を持つようになるのである。

##### 4-2 起源

『百物語』(1659)には

「いにしへ人の語り伝は、何にても百物語をすれば、かならずこわき物あらはれ出る」

(昔の人々の言い伝えでは、何でも百物語をすれば、必ず怖い物が出現する)

と述べられているが、いつ頃からその言い伝えが行われていたかは不明で、文献上では『百物語』を初めとする。

#### ．本論

##### 1. 諸国百物語(1677)

笑い話としての『百物語』(1659)ではなく、怪談集としての初めての百物語怪談集である。5巻、各巻20話の怪談を収めている。後から出る百物語怪談集では100話を収めるものはなかったから、名実共に百物語を代表するといえる。では、序文に見られる諸国百物語の性格について考えていく(以下、原文の現代語訳はp.15参照)。

そもそも此百物語の出所<sup>しゅつしょ</sup>を<sup>たづ</sup>ねるに、信州諏訪<sup>しんしゅう すわ</sup>と云ふ所に武田信行<sup>たけだ のぶゆき</sup>といへる浪人<sup>ろうにん</sup>あり。ある夜、雨<sup>う</sup>中のつれづれ

に伴なふ旅の若侍 三四人よりあひ四方山の咄をするついで、信行いへるやうは、昔より百物語と云ふことをすれば、かならずその座に不思議なる事ありといへり。いざこよひ語りて心見んとて、をのをの車座になみゐて、真中に灯心百筋たてて、灯をとぼし、さて咄をはじめ順々にまわし、咄ひとつにて灯心一すぢづつのぞきけるほどに、すでに咄も九十九になり、灯心も今一すぢとなり、何とやらん物すごき折ふし、座敷の天井へ大盤石などのおつごとく、おびただしき音して灯もきへければ、をのをのおどろきけるに、信行さはがず心得たりといふままにとつておさへ、ばけ物はしとめたり。大きな人の股にてあるぞ、火をともせといへば、手に手に灯をたててこれをとれば、その座につらなりし侍の股をとりふせめたりけり。みなみなどつと笑ひて退出しけり。そのとき執筆の書きしるしたる咄の書を、今梓にちりばめ世にひろめて老若男女のなぐさみ草とす。当時すでに百物語と云ふ双紙あれども、わらんべのもてあそび草にして、出所正しからず。今、此双紙はその国々の諸人も聞きおよび見及びたる咄の証拠正きをあつめ五巻として諸国百物語と名付くるとしか云ふ。

最初、信州諏訪<sup>13</sup>の浪人武田信行が旅の若侍と行った百物語の話を、その時の記録係が書いたと言うが、これは仮託であろう。「百物語と云ふ双紙」とは『百物語』(1659)であろう。そして作者は不明であるが、この作者は『百物語』の話を「出所正しからず」と、事実性が不足していることを指摘し、『諸国百物語』を「証拠正しき」話であると言っている。このような形式は怪談集のうたい文句として、後から出る百物語怪談集にも標榜しなければならないところとなる。

「是れ彼れ証拠正しき咄をぬき書きして」

(いろいろなもののなかで証拠が正しいものを選んで) (諸国新百物語)

「あやしの物語どものそれが中にも、出所の正しきのみ集めて」

(怪しい物語が多いけれどもその中で、出所が正しいものだけ集めて) (太平百物語)

なぜそれほどまで証拠や出所にこだわるかといえ、百物語にかぎらず怪談集の常套句で怪異の実在を読者に印象づけるためであった。そしてこの怪談を「物語」という項目に収めようとしたのも、ただの話ではなく物語性、即ち文学性を期待したのである。

『諸国百物語』の怪談は全国各地にわたり、北は奥州仙台から、南は九州まで及ぶ。内容は『沙石集』(1283)<sup>14</sup>『因果物語』(1661)など既成の作によるものが多い。特に多いのが『曾呂利物語』(1672)で、これによるものが21話もある。

『諸国百物語』の怪談は特に幽霊が圧倒的に多く、全体の三分の一を占める。このことは怪談会の話の内容がまず、幽霊であったことがわかる。例えば、「芝田主馬が女ぼう嫉妬の事」(芝田主馬の女房の嫉妬についての話・巻5)のように女房の嫉妬から殺された下

<sup>13</sup> 現在の長野県中部、諏訪湖畔辺り。

<sup>14</sup> 鎌倉時代(1158 - 1333)の仏教説話集。10巻。霊験談・高僧伝のほか文芸談、笑話も収録。

女の怨念や、「安部宗びやうへが妻の怨霊の事」(安部宗兵衛の妻の怨霊についての話、巻3)のように邪見な夫を取り殺す妻の怨念のように、嫉妬に狂う幽霊や復讐に燃える幽霊が多いのも、幽霊のこのような行為が恐ろしい話の典型であったからである。また、動物の怪では蛇が多い。それは大体、人の執着心が大蛇となって災をなす話で、これが六話もある。これは人間の因業の恐ろしさが好まれて怪談会の話題となったからであろう。

その恐ろしい話の中に、恐ろしい怪異と思ったところが実はそうではなかった話がある。例えば、「近江の国笠鞠と云ふ所せつちんのばけ物の事」(近江の国の笠鞠という所の便所で出た化物の話、巻3)では便所で尻をなでるのを化物かと思ったところ薄の穂であったり、「氣ちがいの女を幽霊かと思ひし事」(気違いの女を幽霊かと思った話、巻4)では裏口で笑って立っている女をみて、死んだはずの女が生きていると思ったところ、隣の気違い女であったり、「豊前の国宇佐八幡へ夜な夜な通ふ女の事」(豊前の国で、宇佐八幡毎日の夜に通う女の話、巻5)では、墓地で髪をさばき金輪をつけた女に出会い、化物かと恐れたが、実は男の病気が治ることを祈っている女であったなどである。怪談の中にはこうした手違いもあったのである。ここでは恐ろしい話も一転して滑稽な笑い話になってしまうのである。序文も結局はこの種のもので、百物語で化物を取り抑えたというので灯をともして見れば、その座の侍の股であったので大笑いしたというのである。この例からしても百物語はその結果の扱いによって怪談にもなれば笑い話にもなり得るものだということが言えよう。そして、その性格が本書にも現れているのである。

## 2. 百物語評判(1686)

序文によれば、山岡元隣(1631 - 1672)という人のところで行われた百物語によったものであるが、その形が通例の百物語とはいささか違っていて、百物語の話一つ一つに元隣が日本と中国の故事をもって評判したものである。

過ぎしに頃、六条あたりに而儒齊先生とて和漢の達者儒仏兼学の老人あり。いはゆる天地山川動植古往今來の事に会通せずといふ事なし。或る夕ぐれの雨さへふりものしめやかなる折ふし、先生を訪らひけるに、はやあたりのすき人二三人あつまりて、世のふしぎにおそろしき事の百物がたりをはじめれば、先生其ひとつひとつに唐のやまとのためしを引き、評判をし給ふ。其道理こまやかにして、事実にもる事なし。いまだ百にも満たざれども、夜も更ければ又の夜といひて止みぬ。やつがれも其座につらなりて、聞き覺へし事を書きつけつ。頃日、反古堆の中より取り出して、かいやり捨つべかりしを、先生の弁論なれば、人の求めに随ひて梓にちりばめ侍る。もし理のそむけるあらば、やつがれが記しあやまれるにて、先生のつみにあらず。見る人ゆるし給へといふ。貞享とらの年二月中旬序す。

作者に啓蒙的意図があったとすれば、百物語に事寄せて怪事の評判をする形をとったのは極めて適切であって、これより良い方法はなかったといえるだろう。本書で取り上げた

怪事を見れば、鬼、こだま、神鳴り、狐、狸、雪女など、その時代の人々の怪異によせる関心がどの辺りにあったかが分かる。そしてそれはまた怪談会や怪異小説で馴染みのものであった。百物語怪談会の隆盛が怪異の数をもっと増し、さらには怪異に対する議論を誘発する。そして人々の関心はそこに集中する。本書はそれに答えるのにもっとも適切な百物語怪談集であったのである。

本書での評判は作者それなりの理論に従ったもので、「有馬山地獄谷座頭谷の事」(有馬山にある地獄谷と座頭谷の話・巻2)では、虫の死を硫黄の気とするなど、一応の科学的な説明もある。そして、多くは、「凡そいきとし生ける物、何れも陰陽の二気にもるる物なし」(およそこの世に生きている全てのものは、何でも陰陽の二気の中で漏れる物がない)と、陰陽二気の交錯を理論的根拠としているところに作者の学殖を知ることができる。しかし、この合理的と思われる説明も、きわめて曖昧なものであったことは、「本心のただしき人は、千歳の狐もたぶらかす事なし」(本心が正しい人は、1000年を生きた狐も誑かす事がない・巻2)や「一心さへただしければ、わざわざひにあふべからず」(一心さえ正しければ、災いに遭うことはない・巻2)で読み取れる。それは結局、教訓なくして啓蒙もあり得ない仮名草子の怪異小説のあり方を示している。また、この解説の多くがのちの鳥山石燕の『百鬼夜行』(1779)に採られるなど、怪談の理論的根拠として今後長く世間に行われたことが確かである。

### 3. 諸国新百物語(1692)

『諸国新百物語』は5年前に出た『御伽比丘尼』(1687)<sup>15</sup>の改題本である。まず、序文を読んでみよう。

軒をめぐる雨しただりて、<sup>こと</sup>琴を<sup>しらべ</sup>調か<sup>と</sup>とあやしく、つれづれなるままに、ひとり<sup>ともし</sup>灯の<sup>かげ</sup>影にむかふ折から、<sup>とも</sup>友とする人ふたりみたり、<sup>あき</sup>秋の夜のなかなかしきを、いかにしてかあかさんととひ来たり。予がいふ、「<sup>およ</sup>凡そ人の心をなくさめしむる道、さまざまなりといへども、かたちを<sup>うごか</sup>動さずして、しかも見ぬ世の人を友とする事、<sup>むかし</sup>昔物がたりにしくはなし。ここに百物語といふは、おどろおどろしき<sup>はなし</sup>咄ばかり<sup>み</sup>目<sup>め</sup>に満たしめて、ふしぎあるを待つ事とぞ。それは<sup>けつ</sup>血気さかのわかうど<sup>もののみ</sup>武士などは<sup>この</sup>好ましかるべし。わがごときは、ただ何となく<sup>けんもん</sup>見聞したる事、打ちまじへてかたらんこそ、こよなう<sup>なぐさ</sup>慰むわざるべけれ。」といへば、<sup>おのおのこ</sup>各<sup>おなじ</sup>是れに同うして、ひとふたとかたり<sup>い</sup>出で、<sup>とを</sup>十づつ<sup>あまり</sup>十余にて其夜は<sup>はなし</sup>咄あかしぬ。それが中には<sup>えん</sup>艶なるあり、哀れなるあり、おかしきあり、<sup>あや</sup>怪しきあり、おそろしきあり、<sup>こ</sup>是れ<sup>か</sup>彼れ<sup>しやう</sup>証<sup>こと</sup>拠正しき咄をぬき書きして、<sup>ひやく</sup>咄百に満たずといへども<sup>あらた</sup>改めず。諸国新百物がたりと<sup>なづ</sup>号け、<sup>あづき</sup>梓にちりばむと云ふ。

『諸国新百物語』の巻四には百物語を扱った話がある。名跡を息子に譲った老武士のもとに友達が集まり、ついで面白しと百物語を始めた。話が百になっても期待する不思議はな

<sup>15</sup> 江戸前期の浮世草子。5巻5冊。怪談が少ない雑話物小説集。

かったので、そのまま眠ってしまったが次ぎの朝、目を覚ますとたった今切って捨てたばかりの女の生首が五つ、血潮に染まって自分たちの枕元にあったのである。これは『宗祇諸国物語』(1685)<sup>16</sup>「話怪異」の百物語の話しとまったく同じである。しかし、ここではそれに加えることがあった。「されば此百物語は、是れ魔を修する行にして怪異を祈る法なり。宵より余事をまじへず、此事に念をこらしたればぞ、かかるふしぎはありける」(この百物語と言うのは悪魔を治める方法でもあり、怪異を祈る方法でもある。夜から外のことをせずに、このことだけすれば、このような不思議なことがある。)と意義づけるのである。これは本書が本来、清雲尼なる尼僧<sup>17</sup>の作という『御伽比丘尼』であったから、この百物語の解釈も仏道信仰と関連させたのである。

そのため、本書には仏道信仰に関する話が半数を占める。それに白鼠を大黒天の使いと喜んだところ、実はうどん粉にまみれた鼠であったと大笑いした話があるが、これは怪談ではなく笑話に近い。

もはや怪談に拘らない百物語なら、話はどうあってもよかったのである。改題に当って作者は百物語が本来怪談に終始すべきことを心得ていたものの、旧作の内容が全く雑多なものであったのでやむを得ず序文でその旨を断らなければならなかったのである。その結果、書名の『諸国新百物語』の性格は先行の笑話集『百物語』と怪談集『諸国百物語』をあわせたもの、すなわち、笑話と怪談をあわせたものとなったのである。

#### 4. 御伽百物語(1706)

6巻、27話。作者は青木鷺水(1657 - 1733)。青木鷺水の文学活動は、まず俳諧から始まり、続いて元禄(1688 - 1703)末年からは浮世草子作家として活躍した。青木鷺水の作品は怪異・教訓性の強いところにその特色がある。さて、序文に見られる『御伽百物語』の性格について調べていきたい。

春くらし、九かさねの<sup>うち</sup>内も外も、<sup>わ</sup>分きてあらしのけふは<sup>の</sup>長閑きと、<sup>う</sup>打ちずして外面のかたを詠めやれば、<sup>こ</sup>来ぬ人も誘<sup>は</sup>ひ斗、<sup>はや</sup>漸<sup>や</sup>綻びそむる梅<sup>か</sup>か香、いと<sup>な</sup>つかしう。夕日の影ながら、袖に移り、心にしむる夕風<sup>は</sup>とぞ、先づ思ひ出づる<sup>こ</sup>比、我が<sup>む</sup>梅園の戸<sup>ぼ</sup>ぼそに、例の<sup>ふ</sup>二人<sup>み</sup>三人ぞ見え来つる。それが中に珍しかりしは、<sup>よ</sup>此四五年か程、あづまの方に浮かれありきて、名ある山<sup>す</sup>勝<sup>く</sup>た<sup>る</sup>地、<sup>あ</sup>跡たれ<sup>ま</sup>す神の<sup>や</sup>社、<sup>あ</sup>行ひすませしといふ<sup>み</sup>仏の寺、<sup>た</sup>尊き<sup>く</sup>隙々残りなく<sup>す</sup>修行し、<sup>あ</sup>行ひ歩行たりとかい<sup>ふ</sup>なる<sup>ひ</sup>聖の、いと<sup>あ</sup>老<sup>い</sup>ぼれて、<sup>か</sup>頭白く、<sup>ま</sup>眉<sup>ゆ</sup>髭なども<sup>す</sup>黒き筋なしと見ゆるをぞ、友<sup>な</sup>ひ出できたる。こは如何なる人にか、思ひの外にとやもてなさまし。「<sup>な</sup>そも何人ぞ」と問はせたるに、此率て来し人のいふやう、「<sup>ふ</sup>是れは六十六部の<sup>お</sup>御<sup>き</sup>経を治めて、諸国をめぐり有とあるうきめ<sup>お</sup>恐ろしき事見もし、聞き尽して、此の春はここに物し給<sup>ふ</sup>世捨人<sup>に</sup>にあ<sup>な</sup>なり。昨夜より我が方に宿<sup>を</sup>を<sup>か</sup>借し参らせ、夜ひとよ語りあか

<sup>16</sup> 江戸前期の浮世草子。5巻5冊。連歌師宗祇が諸国を遍歴して見聞したとする話の集。

<sup>17</sup> 出家して仏道に入った女性。比丘尼。

し、法文<sup>ほうもん</sup>な<sup>ん</sup>ど承りつるに、また二なき希<sup>け</sup>有<sup>う</sup>の物語も侍<sup>はべら</sup>ふに付きて、よし我ひとり聞かんも無<sup>む</sup>下<sup>げ</sup>也と思へば、今宵はここに伴ひ侍りつる」といふに、我もやや心動きて、「さらばよ、かはるがはるあど打ち給へ。まろは物忘れの為<sup>せんかた</sup>方なければ、書き留めても由<sup>よし</sup>あるは残すべかりけり」とて、硯<sup>すずり</sup>ひきよせつつ一つ一つ書いて見るに、いさや浮きたる事ともしらねど、咄<sup>はな</sup>しも咄<sup>はな</sup>しけり。聞きも聞きたる哉。すずろに言<sup>こと</sup>の葉<sup>は</sup>の茂りゆく数<sup>かず</sup>の、やがて十<sup>と</sup>づつ十<sup>と</sup>にもやと、おもふばかり息もつぎあへず、何くれと積りて、果々ては手もたゆく。ねぶたき迄なりにたるに、猶やますぞいふ。聞きまがひたるもあらん。書きもらしたるも有るべし。やがて明<sup>あけ</sup>の日は彼の友<sup>か</sup>の方<sup>かた</sup>へ遣すべかりける程に。又あらたむるにも及ばず。是れが名<sup>な</sup>を御伽<sup>おとぎ</sup>百ものかたりと書いて、なげやりぬ。

この『御伽百物語』の序文では『諸国百物語』『百物語評判』『諸国新百物語』とは違ってなぜか百物語に触れることがない。序文には諸国を巡る僧の語る話を書きとめると、その数が百になった旨の記述があっても、百物語怪談会については言うことがなかったのである。それは『御伽婢子』を意識したためである。近世の怪異小説には百物語怪談集とは別にお伽婢子怪談集とも言うべき一群の怪談集がある。浅井了意の『御伽婢子』(1666)を始祖にして、『新御伽婢子』(1683)『御前御伽婢子』(1702)『拾遺御伽婢子』(1704)の諸作であるが、これらは『伽婢子』の序文に従って怪談を教訓として捉えようとしているのである。『御伽百物語』の作者は百物語にこの教訓性を考慮しようとしているのである。『御伽百物語』と名付けた理由もこの両者を併せようとする配慮の現われで、この作者は怪異小説が遊戯・享楽な性格になって行くのを願っていなかったのである。

それと言うのも百物語が遊戯的・享楽的な催しとして性格をいよいよ強めて来たためであって、百物語怪談集に名を借りて『好色百物語』(1701)のようなものまで現れるのに問題があった。『好色百物語』の作者の目論見は好色本全盛の時であるため、好色に関する怪談を集めて時流に乗るつもりであったらしいが、怪異小説が持ち続けて来た真面目さなどは全然なく、その内容はまさに享楽そのものであった。そしてそれが

「情にまよふ三人法師、色におぼるおぼる三人比丘尼」

(情に迷う三人の法師、色に溺れる三人の比丘尼)

と広告する『野傾百物語』(宝永(1704 - 1710)年間刊)のようなものまで誘発することになったことはなお分明である。この『御伽百物語』作者は、こうした享楽的性格を増しに行く当時の百物語の動向をそのまま首肯することは出来なかったのである。

『御伽百物語』の特徴の一つは、話の多くが近時のものであったことである。さらにそれが年号・時代だけでなく歴史的事実を背景にして話をまとめていることである。特徴の二つ目は、和漢の多くの説話を基に書いたことである。そしてその作品は原本にまさる複雑な構成に怪異小説としての出来栄えを見せている。本書の最終話も百物語の話で、百物語によって幸せになると言う結構な話である。百物語はいまだに信ずるに足る風俗であったのである。



## 5. 太平百物語(1732)

5 巻、50 話。百話に足りないことを配慮してか目録の末に「以上前編終 後編跡より出し申候」(以上で前編が終わって後編は後で出版する)と、後で後編を出そうとしたようであるが、後編の出版の形跡はない。しかも 50 話目の「百物語をして立身せし事」は、百物語によって立身した話で巻末に相応しいものであるから、本書で一応完結のつもりであつたらしい。では、序文から見られる『太平百物語』の目的や性格について考えていく。

やつがり年比西国に経歴して、貴賤僧俗都鄙遠境の分ちなく、うち交はり語らひける中に、あやしの物語どものそれが中にも、出所の正しきをのみ集めて、反舌の端に書き綴り置きしをみれば、其数百に満てり。然るを箇中に蔵めて虫糞となさん本意なれば、是れを梓に「寿」して、吾にひとしき輩に見せなば、永き夜の眠りを覚し、寂寞なぐさむ一助ともならんと、剗厥氏に命じぬ。実に怪力乱心を語るは、聖の文の誠めながら、かく拙き物語も、おかしと見る心より、自然と善悪の邪正を弁へ、賢愚得失の界にいらば、少しき補ひなきにしもあらずと、いにしへの百物語に太平の御代を冠らして、筆を浪花管生堂の窓中に抛つといふ事しかなり。時は谷の戸出づる鶯の初声そふる比ならし。

この序文も百物語の享樂的叙述と伽婢子の教訓的叙述を併合したものである。そして作品の上で併合することの極めて難しい教訓制と享樂性の併合をどうして果たすのかがよく表われている。それはまず読者に「おかしと見る心」を引き起こさせ、そこから「善悪の邪生を弁へ、賢愚得失の界に入らしむ」と言うのが作者の目論見である。すなわち、まず、「おかしと見る心」のような読者の興味をひく話が必要であり、そのためには身近な話が問題になる。本書に動物の怪談が圧倒的に多いのもそのためである。その動物は狐の九話をはじめとして猫四話、蛇二話、狸二話、それに亀、熊、蜘蛛、狼が各一話、その他多数の動物の出るのが一話と全体の三分の二が動物の怪事である。その内容は何の意味もなく、ただ愉快で享樂的なだけの話もあるが、動物を利用することで人間の非道や貪欲な根性を戒めようとするのも多い。例えば、「松岡同雪狐にばかされし事」(松岡同雪という人が狐に化かされた話・巻1)では、貪欲な医者が狐の仕業とも知らず薬料ほしさに石仏を治療させられて、驚き恐れて改心する話である。しかし、動物の怪事が多いだけ幽霊の話が少ないのも本書の特徴である。

## 6. 万世百物語(1751)

『万世百物語』(5 巻)は『雨中の友』(1697・5 巻)の改題本である。作者は改題本『万世百物語』の序文には「東都隠士 烏有庵」と書かれていて、これを作者としたが、この人については何にも知られていない。

奇怪を語るは聖人のいましめ給ふ所、しかはあれども古今小説家の載るを見るに、怪談伝奇枚挙に遑なし。実に漢も倭も好事の人こそををき。予去年の秋、故人の幽栖を尋ねて雨夜のつれづれに茗話せし事ありしに、我にひとしき客の訪ひ来たれるありて、珍らかにあやしき事ども語り出して、主とともに耳を傾け、席を前め侍り

しに、秋の<sup>ながきよ</sup>遥夜をしののめちかく語り明しぬ。<sup>いたづら</sup>徒に<sup>き</sup>聞き捨てなんもおしく、書留めて<sup>さと</sup>里の<sup>わらはべ</sup>児輩に<sup>つと</sup>土産にもかな  
と、<sup>すずりもと</sup>硯需めてひとつひとつに<sup>つづ</sup>綴り<sup>はべ</sup>侍りしに、<sup>つあ</sup>終に五つ巻になりぬるを、すぐに題して万世百物語と名づくる物な  
らし。

本書は怪異小説には珍しく、その表現は雅文体<sup>18</sup>を中心としたもので、それに応じるかのように、各説話の始めを「あだし夢」(巻1第1話だけ「きのふはけふのあだし夢」(昨日は今日の空しい夢))で始まる形をとった。

内容は、はるか王朝時代に連なることもある。「高位の臆病」(高い地位の人の臆病・巻5)では、臆病と言われた公家が、鬼を確かめに出る話など、内容・表現共に王朝の物語世界の風情を当世に求めたものである。その王朝の情緒を、今に転じたつもりか、美少年に関するものが6話もある。そして、そうした情緒とは関わりない動物の怪事が5話ある。その中で狸に関するものが3話あり、「長州に寵愛の一子」(長州に住んでいる愛されている一人の子供・巻3)では、夫婦がかわいがっていた狸が、その夫婦に子供が生まれたために冷遇されたのを憎んで子供を食い殺す話や、「陸奥に山中の怪」(陸奥にある山中の怪しい話・巻1)では、人間の口真似のできない狸が頭と尾で忙しく真似したため、うっかり頭を打ち割ってしまった話など、動物の話は怪談と言うより奇談に属するものだと言える。

中国外来的な『英草子』(1749)<sup>19</sup>の出現の後、宝暦(1751 - 1763)・明和(1764 - 1771)の怪異小説は中国俗語文学を模倣する作品が多くなった。そうした傾向に対して、日本の伝統的な怪異小説を推進しようとする意識が盛んであったことは、この時期に生まれた圧倒的多数の怪異小説を見るだけでも明らかになる。その意識が百物語という怪談集群に投影されている。そして『雨中の友』を『万世百物語』と改題して出版を促したのは、珍しい雅文体の表現のためでもあろうが、それが『英草子』を始めた中国外来文学の余波の中であっただけに意義があったのである。

#### 7.新説百物語(1767)

『新説百物語』の作者高古堂は、明和(1764 - 1771)から安永(1772 - 1780)はじめにかけて自作に小咄風の作品や、その他に小説など数作を残したがその伝は不明である。

先に百物語数多あり、雨夜の伽ともなり児孫のめざまし草ともなりぬ。又ここに一書有り。妖怪のみにもかぎらず、仏神の靈験までも残さずまのあたり人のかたりしを書ととめて、一編となしたり。題せよといふ。ただありのまま新百物語と名づけ侍ることしかり。

<sup>18</sup> 洗練された上品な言葉でできている文。主に平安時代の仮名分。また、それをまねた文。

<sup>19</sup> 5巻5冊の読本。中国白話小説の翻案によって読本の様式を創出した奇談集。9編から成る。

序文では今までの百物語の意義を伽の話と確認したうえで、また自分がその種の本を出版しようとするのである。すなわち、同じ怪談がある時にはお伽の席で、またある時は百物語で語られていたというこの作者の認識は、この両者を併せることによって、その内容が単に怪談に限らず、いわゆる「めざまし草」(人を悟らせるもの)としてのものをも含むことになる。

大体、宝暦期(1751 - 1763)に読本と総称される出版物には、小説とは考えられない随筆的な性格を持った本が多い。これは宝暦・明和(1764 - 1771)に見られる一つの出版動向であった。そして、本書が52話と多かったのも、そうした性格の短い話が数多く含まれていたからである。その上にこの作者は自分の身近な珍しい奇談まで紹介する。例えば、「津田何某真珠を得し事」(津田に住む何々さんが真珠を得た話・巻1)や「長命の女の事」(長生きした女の話・巻4)は、宝暦12年(1762)のことで、時間として近いことであった。また「針を喰ふむしの事」(針を食べる虫の話・巻5)などは、おそらく作者が直接に見たり、聞いたりしたものであろう。

怪談の現実性と言え矛盾したことになるが、この時期の怪談集はそうした傾向があったのである。「僧人の妻を盗みし事」(僧が人の妻を盗んだ話・巻2)を見よう。百姓の九郎七が妻と6歳の娘を家に残し、用事で京都にでかけた。その留守に、火事で家は全焼し、娘は助かったが、妻は焼かれて死んでしまう。九郎七は葬儀をすまし、娘を連れて寺参りに出かけたところ、娘は寺の土蔵の窓に母の姿を見つける。九郎七は思い当たるところもあって、近所の人々と寺を囲み、土蔵の中を捜して妻を見つけ出した。その詳しい事実は、寺の僧が女房と密通し、他人の死体を九郎七の家の中に入れて火をかけて、妻が焼かれて死んだように装ったのであったが、僧は失敗したという。こうした事件もあったであろう。その場所も、女房、僧の名前も明らかにしないこの話には、かえって事実を考慮したふしがある。その他「釜を質に置きし老人の事」(釜を質として生計をたてる老人の話・巻4)は世間にある貧しい一人暮らしの老人の実態を生々しく描いたのである。

現実的な話が多いとなると動物の怪事が少なくなる。狐3話、猿2話、その外に兎と鼠が1話ずつの計7話である。そのうち「狐鼠の毒にあたりし事」(狐が鼠の毒に当たった話・巻1)は、毒を食べた鼠を子狐が食べて死んだ話で、その動物についての話はほとんどが現実味のある話である。作者は明らかに虚妄と見られる話はなかなか採らなかったのである。しかし、怪談集という名にふさわしく、怨念の激しさを語る話が1話くらいはなければならない。「先妻後妻に喰ひ付きし事」(妻が妾を食い殺した話・巻3)は、いわゆる後妻打ちの話で、妾ができて本妻がうとましくなった男が妾と一緒に暮らす。それを知った本妻は怒り狂って、ついに妾を食い殺したという話で、世話と怪談が入り混じったものである。

## 8．近代百物語(1770)

本書は5巻で、各巻3話ずつ全15話で構成されている。まず、序文を読んでみよう。

釈迦文尊者の大徳大いなるかな。上智をさとすに不可説、微妙の間に大悟を得、下愚に至つては三世因果をもつて悪をこらし、善をすすむ。衆生済度の法便仰ぐべし、尊ぶべし。是れ將怪にあらずしてなんぞや。怪の大いなるものなり。近世風雲の僧ありて、遍參の間、伝聞或るひはまのあたり見る処の怪説をかたる。山崎氏書きとどめて五冊となる。是れ將怪の小なる物なり。大いなるものは大益あり、小なるものもまた小補なくんばあらじ。此事を得て梓行して、世に弘むるの理、是れによつて省悟すべし。

近代百物語を理解するために吉文字屋<sup>20</sup>について説明しておこう。近世の怪異小説を考える時、寛延(1748 - 1750)あたりを堺にして前後に分けるのが通例である。それは都賀庭鐘<sup>21</sup>の『英草紙』(1749)の出現を重視するからで、これを契機にその後の怪異小説には中国俗語文学の影響が大きく現れてくるということは先述した。それらは高踏的・知識的な性格を持っていて、一般の読者に馴染めるものではなかったのである。

その中で、大阪の吉文字屋は『太平百物語』『古今百物語』『新選百物語』などを出版した。これらの百物語怪談集はもっぱら教訓を標榜することで、通俗的な怪談集の立場を明らかにしようとしたのである。そして、吉文字屋が百物語怪談集の出版に余念がなかった時期であったから、本書もその一つである。

本書の各巻3話のうち2話は「今はむかし」で始まる話である。したがって、この形式のものが全巻で10話、そのうち7話にこれに先立って内容に関する前置きがある。この形式はすでに『新選百物語』で採られていたもので、前置きの形式は『古今百物語』の中にもあった。したがってこれは吉文字屋から出版される百物語怪談集の形式上の特色といえる。前置きは同時代の「古今奇談」「古今怪談」と角書きする高踏的な怪異小説によく見られることから、通俗的な百物語怪談集にあって、せめて知識的な試みを果たそうとするものであったと思われる。

その前置きは長いものもあれば、短いものもある。内容の面でも、殺生、貪欲、愚痴、好色などで、序文で言う通り教訓的で勧懲の濃いものである。例えば、「貪欲心が菩提のはじまり」(貪欲心があったが真理を悟る・巻2)には強欲非道を戒めた前置きがある。強欲な女房が人に頼まれて買い物をすれば、それをごまかして何かと口実をつけて金品をだまし取り、お金を儲けたが、毎晩閻魔に責められる夢を見て、前非を悔いて仏道に志す話である。この話は事実としてありそうな話で、ありふれた地獄の怪談を何かと世話的な話に改作しようとしたものである。

<sup>20</sup> 大阪における近世中期最大の書物を出版したり、売ったりした店。

<sup>21</sup> 1718頃 - 1794頃。江戸中期の読本作家。上田秋成の師。中国白話小説を翻案して初期読本の先駆をなした。『英草子』『繁野話』がある。

## 9. 教訓百物語(1805)

『教訓百物語』(2巻)の作者は村井由清で心学者の一人と思われるが、その伝は不明である。特に序文はないが、上巻の始まりに百物語について述べている。

むかしから<sup>ひやくもの</sup>百物がたりすると、<sup>ばけもの</sup>化物が出るといふ事を言ひ伝へますが、是れは<sup>はなは</sup>はなはだ<sup>ましへ</sup>ありがたい教なれど、<sup>こ</sup>是れを<sup>まこと</sup>実にしる人がない。其<sup>ひやくもの</sup>百物がたりの<sup>し</sup>仕やうはといへば、<sup>ま</sup>先づ<sup>を</sup>大かは<sup>あぶら</sup>はらけに<sup>いつ</sup>油を一<sup>すじ</sup>ばいさして、<sup>だん</sup>とうしんを<sup>しだい</sup>百すじ入れ、<sup>ひやく</sup>燈し<sup>い</sup>置き、さてそれから<sup>はな</sup>こわひ<sup>はな</sup>嚇しを一つしては<sup>ひとすじ</sup>一筋けし、又一つしては<sup>すじ</sup>一筋けし、<sup>だん</sup>段々次第に<sup>しだい</sup>けして<sup>ま</sup>真くらがりになると、それから<sup>ばけ</sup>化<sup>すなは</sup>ものが出るといふ。是れ<sup>たどへ</sup>則ち人の心の<sup>すなは</sup>警をいふたものじや。

百物語を人の心に例えた作者は、百筋のろうそくを明るくて純粋なものとした。それから一筋ずつ消して成長すると、次第に人間本来の本心を失って、ついには真っ暗になってしまうのである。それで、化物が入って来る。だから「とかく心の内のばけ物を去って本心をみがきなされませ」(とにかく心の中の化物を去って本心を磨くべきである)と戒めて教訓する。その心の内の化物とは、人間の十悪のうち心に関する三つ、すなわち貪欲(むさぼり)、瞋恚(いかる)、愚痴(あきらめなし)によってもたらされる人間の不行跡である。それを上巻では狐狸や鬼、下巻では猿や河童などに託して説いているが、その怪奇によって修身の道を説くのは、心学道話の通例でもあったのである。

上巻は、百物語を聞きこんで狐狸に化かされて本心を失い、真っ暗になった家の全ての家財道具に手足が生え、目鼻ができて飛び出して、古道具屋に走り出すことで終わる。下巻は、ついに本心を失ってしまった人々が、その本心を取り戻すのが心学であるといいて、『孟子』の「学問之道無他求其放心而已矣」(学問の道はただその放心を求める以外にない。)でおわる。まさに楓刑教訓の通俗書である。

## ・ 結論

百物語に対しての態度について整理してみよう。近世の比較的早い時期の頃の百物語怪談会は武士の肝試しの場で話されるほど真摯なものであった。『御伽婢子』では、「恐ろしき事怪しき事をあつめて百話すれば、必ず恐ろしき事怪しき事あり」(恐ろしい話や怖い話を集めて百話すれば、必ず恐ろしい事や怪しい事がある)と、百物語を信じて疑わない人の姿がみられる。しかし、時間が経つにつれて、『諸国百物語』では、「昔より百物語と云ふことをすれば、かならずその座に不思議なる事ありといへり。いざこよひ語りてころみん」(現代語訳参照)と、一途な姿がみられなくなる。さらに、『宗祇諸国物語』では、「百物語かたり始めて俗説のごとき怪異ありやなしや是れをこころむ(百物語を始めて言い伝えられたように怪しい事があるかどうか試みる)と、いたずらに懐疑的となり、その場

も多分に遊戯的享樂的なものとなってしまう、百物語すれば必ず怪しき事ありと言い伝えた信念など、どこにも見られなくなっている。それがさらに下って享保(1716 - 1736)の『和漢怪談評林』ともなると、「ばけものと言ふ物見たる者すくなきによって是れを見んとたくみて拵えたる物成るべし」(化物という物を見た人も少ないので、これを見ようと試みってみることになる)と、化物を見ようとする好奇心の戯れとなってしまう、ついには不思議なことが起こることすら期待していないのである。

以上、今まで百物語怪談会から百物語怪談集の性格・目的、及び影響について調べてみた。百物語怪談集の性格は恐ろしい話から滑稽で、あるいは教訓的な話へと変わって行ったことがわかる。目的は知識的な中国外来文学に対して日本の伝統的な怪異小説の正統を守ることにあった。そしてその中心的な役割を果たしたのが吉文字屋であったのである。そして、このような対立が百物語を名乗った怪異小説の隆盛をもたらすという影響を与えている。

百物語怪談集は次のように分類することができる。仏教系、中国系、そして自分が体験した話、聞いた話、この会のためにあちこちを歩き回って採集した話、自分で作った話のような民話系の話である。そして、他人がきくと怖がることを期待して、これらの話を怪談会に持ち寄って来た。こうした話を出し合うことにより、恐怖を楽しんだのである。怪談会での話のほとんどは記録されることなく一回きりで消えていったが、この怪談会に興味を持った人が、百物語の怪談形式を真似て、怪談会で語られた面白かった話や自分で採集した怪談・奇談を集めたのが「百物語怪談集」であった。

しかし、日本と一番近く、そして長い間交流し続けて来た朝鮮(1392 - 1910)との大衆文学の相互影響については研究がまだ進んでいないようである。私はこれから、知識人の文学ではなく、怪談を始めとする日本と朝鮮の大衆文学の交流や、中国文学に対しての態度などを研究し、ひいては日本と朝鮮の一般庶民の生き方や考え方を比較研究していきたい。

## ．原文現代語訳

### 1．諸国百物語(1677)

そもそもこの百物語の出た所を捜し求める時、信州諏訪という所に武田信行という浪人がいた。ある夜、雨が降っていて何もすることがなく退屈していたので、一緒に旅行している若い侍 3・4 人が寄り合って様々なことについて話をしていた。その時、信行が「昔から百物語ということをするれば、必ずその座に不思議なことが起こると言われる。さあ、今夜、語って試みよう。」と言った。そして一人一人が輪になって向かい合って、真ん中にろうそくを百個たてて火をつけた。さて話を始め順々にまわし、話一つにろうそくを一つずつ消していくうちに話はすでに九十九になり、ろうそくも今一つしか残っていない。

何が起こったのだろうか、物すごい音がしたその時、座敷の天井から大きな石が落ちるような大きな音がしてろうそくも消えた。皆が驚いているうちに信行は騒がず落ち着いてそれをとって押えた時、化物は静かになった。大きな人の股のようであった。「火をともし」と言って皆が手に火をたててこれを見れば、その座に参加した侍の股を抑えていたのであった。皆はどっと笑って帰った。その時、記録係が書き記した話の本を今、出版して世に広めて老若男女の楽しみの元とする。その時、すでに百物語という本があるけど、子供のもてあそびの元であり、その出た所も正しくない。今のこの物語はその国々の人々が聞いて、そして見た話のなかで、話の証拠が正しい物語だけを集めて、5巻として諸国百物語と名付けることになった。

## 2. 百物語評判(1686)

過ぎてしまった昔、六条あたりに而慍齊先生と言われて中国や日本のことをよく知っていて儒教や仏教にも精通している老人がいた。所謂、天と地と山と川と動物と植物と昔の事と今の事に知らない事がない人である。ある夕暮れに雨が物静かに降っている時であった。先生を訪ねたところ、早くも2-3人集まって、世の不思議で恐ろしい事の百物語を始めていたので、先生がその一つ一つに中国や日本の先例を引きながら評判をなさった。その道理が細部まで及んでいて、事実には漏れることはない。まだ百にも満たされていないけれども、夜も更けていたので「次の夜にしましょう。」と言って止めた。我々もその座に連なって、聞いて分かったことを書きつけた。この頃、紙屑の溜まったものの中から取り出して全て捨てるべきだったが、先生のお話なので、人の求めに従って出版して世間に広める。もし道理に背けることがあれば我々の記し誤ったのであり、先生の間違いではない。読む人に許してくださいと言っておく。貞享虎の年、二月中旬序を記す。

## 3. 諸国新百物語(1692)

軒に落ちる雨は滴って、琴を演奏する音のように心がひかれ、つれづれな時の時間潰しに、一人で灯の影に向かった時、友達二・三人が秋の夜が長いのでどうやって過ごそうかと訪ねて来たのであった。私が「普通の人には心を慰める方法として、いろいろな方法があると言うが、しかしその形を動かさずに、しかも見えない世界の人を友達とする事として昔物語にまさるものはない。ここに百物語というものがあって、これは恐ろしい話だけを百に満たして、不思議な事が起きるのを待つという。それは血気溢れる若者や侍は好むのが当然である。僕達みたいな年寄りにはただ何となく見聞したことを打ち交えて話すことこそ、この上ない慰みになる。」と言えば、皆これに従って一つ二つ話し出した。十話ずつ十余りして、その夜は話し明かした。その中には艶やかなものもあり、哀れなものもあり、素晴らしいものもあり、怪しいものもあり、恐ろしいものもある。これかれの中で証拠が正しい話を抜き出して、話は百に満たないけれど改めなかった。諸国新百物語と名前を付けて出版して世間に出す。

## 4. 御伽百物語(1706)

春が来たようだ。九重で重なっている家の内も外を分けて嵐の吹く今日は長閑な日だ。

外の人を呼ぼうとして名前を呼べば、来ない人を誘うばかり。ちょっと綻びた梅の香りととも心が引かれる。夕日の影が袖に移り、心に染みしてくる夕風、と思い始めた頃に、私の梅庭の戸口にいつもの2-3人が見えて来た。その中で珍しかったのは、4-5年ぐらい関東の方に旅して、有名な山、優れた所、人の来ない神社、仏の行いが終わったと言われる寺、尊い所を隅々まで残りなく修行しながら歩き回ったと言う聖であった。とても老いぼれて、頭は白くて、眉髭なども黒い所は全然ないその聖を連れて来たのである。これはどのような人なのであるかと思ひの外だと思った。“その人は誰ですか。”と聞いたら、この連れて来た人は“この人は66部のお経を読み尽くして、諸国を巡りながら全ての辛いことや恐ろしいことを見て、聞き尽くし、この春はここにいらっしゃる世捨人であります。昨夜から私の家にお泊めしていて、昨日の夜は一晩語り明かし、法文など承ったので、また二つもない珍しい物語もしていただきました。よし、私一人だけ聞くのも悪いと思ったので、今夜はここに連れてきました。”というので、私も少し心が動いて、“そういうことなら一つ一つ言ってください。わたしは忘れっぽいので、書き留めてもいいと思うのは残すべきでしょう。”と言った。硯を引き寄せて一つ一つ書いてみたら、あてにならない事もあるかもしれないけれど、話す方もたくさん話したし、聞く方も熱心に聞いた。話の数が多くなって、やがて10ずつ10になったと思うばかりだった。休憩もせずに様々な話何やかやと積もって、ついには手も疲れた。眠くまでなったのに、それでもなお止めずに話した。聞き間違ったのもあるだろう。書き漏らしたのもあるだろう。やがて朝になった。その日はその友達の家へ帰らなければならなかったのに、また改めることもできなかった。この名前を御伽百物語と書いて世に出すことになった。

#### 5. 太平百物語(1732)

私は長年の間、西の国に旅して、尊賤・聖俗・都鄙、あるいは遠境の区別なく、うち交わりながら語った中にある、多くの怪しい物語のなかでも、その出所が正しいものだけを集めて、紙屑の端に書き綴って置いたものをみれば、その数が百に満ちていた。それを箱の中に入れて置いて虫糞とさせるのも本意ではないので、これを出版して命を長くし、私と同じような友達に見せたら、長い夜の眠りを覚まし、つれづれを慰めるのに役に立つだろうと剖厥に言った。実に怪力乱心のような不思議な話をするのは、聖人の誡めではあるが、このような拙い物語も素晴らしいと見る心から自然と善悪の悪くて正しいことを判別し、賢くて愚かで得失のある世界に入れる小さな補いがないこともないだろうと思ひ、昔の百物語に太平の御代の恩恵を受けて筆を浪花管生堂の窓の中に抛つことになった。(書くことになった。)時は谷が見える戸から鶯が初めて鳴く声が聞こえる頃。

#### 6. 万世百物語(1751)

奇怪を話すのは聖人が誡めていることである。そうではあるが、昔や今の小説家の内容を見ても、その怪談伝奇についての内容を数え上げるときりがない。実に中国にも日本にもこのようなことを好む人が多いのだ。私は去年の秋、今は亡くなった幽栖を尋ねて、雨が降っている夜のつれづれな時に気軽に話しをしたことがあったが、私と同じようなお客さんが尋ねて来て、珍しく怪しい



事を話し出したので、主人と一緒に耳を傾けて、席を前に進ませて熱心に聞いておられますと、秋の長夜を夜明け近くまで語り明かしていた。無駄に聞き捨ててしまうのも惜しいので、書き留めて村の子供たちに土産でもしようかと思って、硯を用いて一つ一つ書いておられますと、ついに5巻になったので、すぐに万世百物語と名付けることになった。

#### 7. 新説百物語(1767)

以前から百物語は数多くあり、雨が降る夜のつれづれを慰めたり、子孫の悟る元ともなっている。またここに一冊の本がある。妖怪だけでなく、仏神の霊的な経験までも残さず、目のあたりにした人が語ったのを書きとめて一編とした。題をつけなさいと言われた。ただありのまま新百物語と名付けますことになった。

#### 8. 近代百物語(1770)

釈迦の文を尊敬する人の大徳は大きい。優れた知恵を諭すのに必ず必要であり、微妙の間に大きく悟らせ、非常に愚かな事に至っては三代に因果をもって悪を懲らしめて、善を勧める。人々を悟りの世界に導く法便は仰ぐべきで、尊ぶべきである。これは怪がないことはない(怪がある)。怪の大きなものである。この頃風雲のような僧がいて、いろいろな所へ行っている間、聞いたりあるいは目のあたりに見た怪しい話を語る。川崎氏が書きとめて5冊となる。これはやはり怪の小さな物である。大きなものは大きな益があり、小さなものでもまた小さい補いがあるだろう。このことをもって出版して世に広めることになった。これによって自省して非を悟るべきである。

#### 9. 教訓百物語(1805)

昔から百物語をすると、化物が出るという事が言い伝えられていて、これはとてもありがたい教えであるが、これを実に知っている人がない。その百物語の仕方と言えば、まず大きな土器に油をいっぱい入れて、ろうそくを百筋入れ、火を燈して置き、さてこれから怖い話を一つしては一つ消し、また一つしては一つ消し、だんだん次第に消して真っ暗になると、それから化物が出るという。これは即ち人の心を例えていうことである。

### ・参考文献

- 市古貞次 外 7 精選日本文学史 明治書院 1999  
須永朝彦 日本古典文学幻想コレクション 怪談 国書刊行会 1996  
太刀川 清 百物語怪談集成 国書刊行会 1995  
太刀川 清 続百物語怪談集成 国書刊行会 1993  
大橋利夫 日本文学作品名よみかた辞典 日外アソシエ - ツ 1988  
市古貞次 外 9 日本古典文学大辞典 全六巻 岩波書店 1983